

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森山 学

近代の建築・都市を考えるにあたって、スポーツを含む衛生概念の重要性は指摘されるが、その理念が個々の建築家においてどのように理解され、どのように実現されるかを詳細に検討することなしに衛生概念を一般化することは、短絡的な手法論に陥ることになる。その意味で、20世紀を代表する建築家の一人であるル・コルビュジエの考え方を明らかにすることは重要であるといえよう。

本論文は、スポーツを包摂する身体文化の観点から、20世紀を代表する建築家ル・コルビュジエと医師ピエール・ウィンターとの協働関係を読み解くことで、こうした問題に答えるとともに、従来のル・コルビュジエの建築理解に新たな地平をもたらそうとしたものである。

これまでの先行研究では、ウィンターによるル・コルビュジエの都市計画への影響としてスポーツへの配慮があげられるもののその詳細には触れられてこなかった。本論文では、ウィンターやル・コルビュジエ自身の公刊された論考に加えて、ル・コルビュジエ財団に残された書簡等の史料を分析することでその詳細な内容と協働関係の実態を詳らかにすることに成功している。

本論文は、序章、本論3章と結論から構成される。

序章は起論にあたるもので、「衛生」という近代のパラダイムに密接に関連するものとして「スポーツ」を挙げ、それが身体文化という上位の概念で位置づけられるべきであるとしている。

本論では、ル・コルビュジエとウィンターの協働関係を3つの次期にわけて分析を行っている。

第1章では、ル・コルビュジエが編集し、ウィンターが寄稿した雑誌「レスプリ・ヌーヴォー」誌の時期、1920年代における両者の考え方と協働関係を、主として「レスプリ・ヌーヴォー」誌における身体文化を題材とする19編の記事から分析している。そこでは、ウィンターの主張する「新身体」の内容が明らかにされ、それが雑誌名「新精神」を補完するものであると位置づけている。特に、近代的健康を獲得するための生活制御の方法に見られるテーラー主義的考え方が人間＝機械論に基づくという指摘は、後の「自然法との調和」とは一線を画するという意味で重要なものといえる。さらに、ル・コルビュジエが近代的健康を獲得するための手段として「スポーツ」をどのように建築、都市に取り込もうとしたかに関して具体的事例を挙げて論証している。具体的には、この時期、ル・コルビュジエは、建築に「スポーツ」専用の空間を取り込み、「スポーツ」のための時間を積極的に割り当てようとしたことが示されている。

第2章では、二人が共同編集した「プラン」誌とプレリュード紙の時期、具体的には1930年代における両者の考え方、及び協働関係を分析している。その結果、この時期の「呼吸」をキーワードとする両者の考え方を明らかにしている。ただし、ル・コルビュジエによる「正確な呼吸」については、ウィンターが批判的であったことを指摘している。ウィンタ

一が「自然法との調和」を重視したのに対し、ル・コルビュジエは現実的な対処法を示したという指摘は、医師と建築家という両者の立場の違いを浮き彫りにしている。

第3章では、ル・コルビュジエが主宰し、ウィンターが幹部を務めた ASCORAL の時代、具体的には 1940 年代における両者の考え方と協働関係を分析している。その結果、ウィンターの身体文化に関する考え方が「自然法との調和」からさらに一般化し、物理的な身体を超えて全体としての生を問題とするようになったこと、それが「生物学」というキーワードにこめられたことを示した。ル・コルビュジエについては、この時期はじめてウィンターに言及することが明らかにされ、ウィンターの「生物学」が彼の同時期の建築・都市の考え方にも通底するものであることを論証している。一方で、レスプリ・ヌーヴォー時代に専用スペースとして拡大されていったスポーツスペースが、この時期、寝室の一角に回収されてしまうという事実の指摘は興味深い。このことは、機能と部屋との対応が機能と空間の対応へと一般化される論理的帰結であると考えられ、身体文化の観点から近代建築の特性を浮き彫りにするものといえる。

結論では、これまでの議論を整理するとともに、古代における身体文化との関係や現代の建築への影響について言及している。

以上、本論文は、ル・コルビュジエとウィンターの協働関係を身体文化の視点から 1 次史料に基づいて再考察することで、ル・コルビュジエ解釈に新たな断面を提供するだけでなく、近代建築を再考する新たな視点を提供する貴重なものといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。